

浄土

四月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授承認雜誌第三五二号)
昭和四十四年三月二十五日印刷 昭和四十四年四月一日発行

第三十五卷

第四号



目 次

表紙「桜」松濤達文画

念仏こそわが遺跡——御忌会に因んで——	丸 山 宗 隆 (2)
降誕会によせて 花まつり徒草抄	山 本 恭 雄 (5)
私の座右銘	吉 水 大 信 (8)
花の頃	長谷川 宣 丈 (10)
十二因縁④ 真実の心 (名色)	渋谷 賢 応 (14)
人身受け難くして	小 柳 晟 (17)
現代生活と宗教⑦ 阿弥陀仏信仰	権 藤 俊 光 (20)
ハガキでひとこと④ 春によせて	(22)
聖典童話 闘諍を止めよ②	つるたたんせん (24)
歴史への関心	山野井 杲 琇 (29)
ひとくち伝記④ 裏から逃げた僧正さま	高 橋 良 和 (30)





今月のことば

北国でも、そろそろ眼のあたりに、春の芽ぶきをみることが出来る頃とおもいますが、寒いながい冬から解放されて春は、もうそこまできている感じがいたします。

桃も、桜の花も時期をおなじくして、一度に咲きはじめ肩にふりかかる花びらに、春のおとづれが肌に実感されることでしょう。幼き日、美しい花に飾られた花御堂のなかに、甘茶をかけられてたっておられたお釈迦さまの肩にも、一片の花びらがくつついていた姿が、妙に印象にのこっております。

幼きころのささやかな印象や小さな感動のつみかさねが、人間の成長する過程のなかで、いかに大切であるかということを、現代は考えてみる必要があります。

芽ぶき、蕾、開花は、植物の自然のすがたでありましようけれども、その移ろいゆくすがたのなかに、不思議さの感動を味うこと、それは、やがて、人間が生命をうける不思議さ、尊さを感じ得る眼を開くことにもなることです。

新しき靴そろへあり入学児

虚子

未知の世界への期待と不安のなかで、子供は、子供なりの欲望をおさえ、精一杯の努力を傾注していますが、その未知なるものの体験を通して味あわれる感動を大切にするとともに、あたたかく育ててやりたいとおもいます。

ものごとに対するところふるえる感動を、現代人が失いつつある最大の原因は、情緒性の欠如といえましよう。美しいものを、すなおに美しくみることができ、喜びをほんとうの喜びとして感動的にうけとることのできるのは、情緒性によるのであります。

知性的な面がいくら開発されても、情緒面は育てることはできません。信仰によってのみ育くまれるものであり、お念仏は、そのことをおしえ体現させてくれます。

念仏こそわが遺跡

——御忌会に因んで——

丸 山 宗 隆

(前長野市仏教会会長)



浪華女や 京を寒がる 御忌詣

蕪 村

お念仏のみおしえを開かれた法然上人のお亡くなりになられた忌日の法要を、浄土宗では御忌会といいます。

元来、御忌会というのは、宮中において天皇、皇后の忌日のことを申しあげるのですが、とくに法然上人のお徳を讃え、大永四年（一五二四年）に後柏原天皇により勅許とされてよりこのかた、法然上人の忌日を「御忌」といって、毎年盛大な法要がいとなまれております。

むかしは、正月廿五日、法然上人の御命日を中心に法要をおこなったので、冒頭のような句がよまれたのでしようが、

現在では、春たけなわの四月中頃より御命日の廿五日まで、桜の花ふぶきにつつまれて、豪華絢爛たる華やかな法会が、知恩院や増上寺の本山をはじめとして、浄土宗の各寺院でおこなわれております。

二

おもえば、法然上人の一生涯は、かならずしも、御忌会にもしだすような、はなやかなものではありませんでした。むしろ、その晩年は、上人のご円満なご性格とは異にして、波瀾ときびしい生活の連続でした。

「専修念仏の停止」の宣旨のもとに、やがて、四国へ流罪されることとなったのであります。建永二年（一二〇七年）二月のこと、上人は七十五才のお年であられました。

上人の配流は、念仏門下にとっては、たえがたい打撃であり、上人の御身を案ずるところのなげきも切実でありました。弟子の信空は、悲しみと動揺につつまれている門下のなげきを、つぎのように、上人にうったえるのでした。

「このたびの上人の流罪は、ただ一向専修のためです。しかも、老齡の御身で流罪の途につかれては、御命も不安であり、日頃の恩顔を拝することもできません。しかし、勅命ですから、表面は専修念仏を止めることとして、内々にて御化導あそばされたいかがでしょうか。」

そのとき、上人は毅然とした態度で、かように答えられています。

「流刑されたことは、決してうらみに思っていない。すでに八十に近かい年である。たとえ、師弟がおなじ都に住んだとしても、この世での別離は真近かであろう。たとえ、いとうても、死するは人のいのちである。浄土での再会を、どうして疑うことができようか。いままで、専修念仏の興行は、久しく京都でおこなわれていたが、辺鄙な地方の人びとにすすめることが念願であった。いま、この念願がかなえられることは、朝恩というべきであろう。念仏の法門は、人がとめようとしても、とどめることはできない。なんで世間の機嫌を気にしなければならぬのだろうか。経典や釈論をかくす

必要は毛頭ない。」

上人の心には、うごかすことのできない、つよい信仰がみなぎっておられたのです。

しかし、やはり弟子の西阿が、師匠法然上人の身をかばう一念から

「いくら経論にあるからといって、世間の機嫌をそこねるばかりです」

といったのに対して、上人は、毅然として、

「たとえ死刑にされても、この専修念仏のおしえは申さずにはおられない」

と述べておられます。

まことに、法然上人には、流罪に対するうらみごとよりも、むしろ、地方の庶民に念仏信仰をつたえるよき縁とうけとめられておられます。門下の人びとは、弾圧に当面して、一步も二歩も後退していましたが、上人は、さらに、よき因縁とうけとめて、念仏弘通の情勢をもやしておられるのでした。

三

配所の四国にむかわれる旅のさきさきで、上人はもとめられるままに、阿弥陀さまの救いを説いておられます。

農民、獵師、遊女など、その日その日を、ぎりぎりに追い

つめられて生活している、いわゆる庶民であり、文字なき大衆を相手に、上人のあたたかい肌を通して、すくいの手がさしのべられたのでした。

たとえば、室の汨（室津）の遊女は、みずからの罪業のかさに泣きながら、必死にすくいをもとめるのでした。罪障深重の遊女にふかい同情をよせながら、

「できることなら、いまの身を売る職業をすてよ。しかし、それでもできぬことなら、やむをえず、今のままで、ひたすらお念仏することである。阿弥陀さまは、むしろ罪人のためにこそ、すくい誓願をたてられたのである。」

と、罪に涙し恥じらう遊女を、慈悲ぶかく、はげまし、さとされる上人でありました。

法然上人が、四国の配所に着かれてまもなく、九条兼実公は、亡くなられておりますが、生前、兼実は、中納言光親に委嘱して、上人流罪の恩赦について後事を托されました。

とかくするうちに、勅免の宣旨があり、配流をゆるされて、上人は、子松庄をあとに、摂津国の押部にいたり、やがて勝尾寺に入られるのであります。

建暦元年（一二一一）十一月、漸く許されて、なつかしい京都へ帰えられた上人は、すでに七十九歳のお年になっておられました。

京都に帰えられた上人は、東山大谷の庵に入られました。しかし、老齢にくわえて旅の疲れがくわったのでしょう。翌建暦二年（一二一二）正月を迎え、上人は病床におつきになられました。

静かな、たえまなきお念仏が唱えられました。声は高く、あるいは低くなっても、お念仏はつづけられました。

浄土に往生する、という確信は、上人の澄んだ心に、はっきりと刻まれていたことでありましょう。

臨終真近かきを感じた弟子たちは、上人亡きあとの遺跡について、おたずねをするのでした。上人が仰しやられるに、

「遺跡を一カ所にとすると、法はあまねく弘まらないだろう。わが遺跡は津々浦々あらゆる処に満ちている。お念仏は生涯をつらぬくものである。お念仏の声するところは、貴賤をとわず、みな、わが遺跡である」

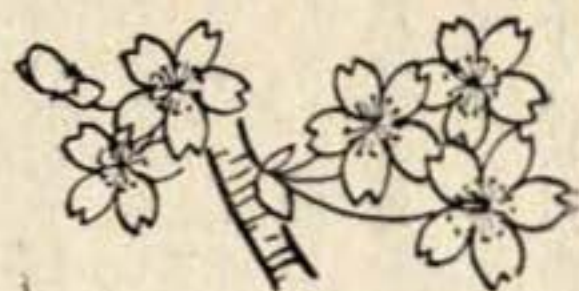
お念仏の声するところ、わが遺跡という言葉には、ふかい味があります。なんと徹底した信仰ではないでしょうか。

それは、時代をこえ、空間をのりこえて、お念仏は、いつまでも生きつづけることを意味しています。

今年も、また御忌会を迎えましたが、上人の晩年の御生活を偲びながら、弘法に対するきびしい姿勢とともに、あたたかい底しれぬ深さを感じさせられます。

——降誕会によせて——

花まつり徒草抄



山 本 恭 雄

(千葉県木更津市瑞光幼稚園)

幼なき頃、東京の山の手にある寺で育った私は彼岸が過ぎると境内に咲き始める花の蕾がほころび、次第に花をつけていくのが待ち遠しかった。というのも四月七日になると、決して祖母が私たちに花を丁寧に摘ませて、それで花御堂を飾ってくれるのである。花の不足したときなど、椿の蕾を手で花びらを返して開いた花の形に整えたりするのも楽しみであり、八日になると竹筒や空びんをもって近所の子どもたちが何回も甘茶をもらいに来た。その為に台所から本堂まで足しげく甘茶を運んだものだった。

又寺の周辺に八ヶ寺程の寺院が並んでおり、各々の寺院に花御堂が飾られ、甘茶をかけるたびに童顔のそれぞれの誕生仏が微笑みかえしているようで、花御堂の飾り方をみて廻るのを楽しみにしていた。

現在では、処は異なるが、これも又俗に寺町と呼ばれている小庵に起居しているが、今では寺々を廻っても花御堂も、「甘茶あります」などというほほえましい貼紙もみられず、軍酒門に入るを禁ずに代って境内駐車禁止の看板がみられるばかりになった。それでも十年前は某寺の老僧が胆入りで白象を引いて花まつりを例年行っていたが遷化後はその催しも絶えてしまった。お手伝いをさせて頂いていた私が、そのあとをうけて翌年から幼稚園、BS、仏青、檀信徒の合同花まつりをもち今日に到っているが、町の中は既に白象や稚児達の練り歩く交通状態ではなくなってしまった。

先年山村にある寺の花まつりに話を頼まれて訪れたときのことである。本堂正面に花御堂が飾られ、廻廊には数十の竹筒が段になっておいてあった。竹の子が顔を出している裏の

竹やぶから切ったのであろう青くて美しいものばかりである。やがて訪れてくる老若男女は、手に手に自分の庭や畑に咲いた花をもって詣りにくるのである。

桃や桜、椿や沈丁花、それぞれに持参した花は竹筒にさされる。次第に本堂全体がみんなの花で花御堂に生れ変わっていった。

楽しそうに寺を訪れる人々の顔には、いかにも花まつりらしい情緒が一杯の風景だった。青竹の花はあとで無縁仏や野の仏に供えられるとのことであつた。そこは、バスで三十分程なのに、町ではみられぬ心暖まるものがあつた。そこには人々の美しい花まつりの姿がみられたのであつた。

涅槃会の日、組内の青年僧の例会があり、涅槃について語り会つた。涅槃会が花まつり程、一般に知られないのは、灌仏会が花まつり、成道会がおさとの日というように安易な名称がないからであらうし、お釈迦さまが人々に忘れられているからであらうし、且つ涅槃像や涅槃図が人々の目にふれられなくなつてしまつたからであらうなど話が出た。

花まつりも又同じであらう。一般の中には殆んど花まつりの薫りはみられない。寺院すら行事をもつことが少なくなつて来ている。

現在多く行なわれているところは、仏教保育を實踐してい

る幼稚園や保育園、日曜学校などではなからうか。そこには子供を通して家庭にまで花まつりの意義をしらしめていく。

某教団のように国際色豊かな盛大な花まつりや商店街を協賛して花まつりを催したり、公会堂などで人々を集めて催すなどの行事も年々盛んになって来ている。しかしそこには豪華さや賑かさのみを求めて企画がねられる。タレントでも動員しなければ人々の集らぬ時代であり、仏教再興をめざし、且つて花まつりを提唱された時代とは既に時代は異つて来てしまつた。

ただ「まつり」なら、みこしや白象が街道を練ることの出来なくなつたように、益々人々の生活から、心の中から分離したものになっていくにちがいない。

本年四月幼稚園に入園する園児の父兄八十名を対象に、花まつり、成道会、涅槃会について、それを知っているか、知らないか、知っていたら、どういふことなのかアンケート式に記入してもらつた。主として二十代から三十代の母親である。

花まつりについて、知っている、お釈迦さまの誕生日と答えたものが二十四名で約三分の一。成道会、涅槃会についてそれぞれ答えたものは僅かに六名であつた。花まつり位知つていふと考えるのがわれわれだが実際には三分の二もわか

らないと答えている。

しかしこれは知識として知っているものが三分の一であつて、童心の想い出などに連るものは又これ僅かなものになつてしまふのである。私が先に幼き日の想い出を書いた。しかし、それは寺に生をうけた故にのことであり、今日の若い人々に灌仏の想い出をたづねてもその多くが、それを語ることにすらできない。

これから子供を育てようとする母親がそうである。こどもたちに花まつりのことを語ることも出来ないし、想い出を話してあげることも出来ない。寂しいことである。

花まつりは情緒の世界であり、豊かな宗教情緒を養う、讃仏の日である。

仏教の行事の中で花まつり程人間的なものは少い。盆も彼岸も、十夜も施餓鬼も、それなりに人々には一応の説明を要する。しかし花まつりは、素直に「誕生日おめでとう」と理屈なしに祝意を表せるものではないだろうか。それは生れいずるものに対する祝福であり、生命に対する憧憬である。

花まつり程親しめるものは少いのに一般の人々の生活の中に生きないのは、過去の花まつりにとらわれすぎているからではないだろうか。まつりから脱皮することが肝要なのかも知れない。

文明が進むにつれ、事故や災害が急増し、光と空気と土が失われている。危機感を欺くように、スピードやセックスが氾濫し、益々人間性が失われていく。大量生産、大量消費の中で人の生命まで軽視されている。

今日こそ生命尊重、人を讃え、自己をみつめ他を活かす心がけが望まれ、実践されなければならない。

偉大なる聖者釈尊は仏教徒にとって人間としての理想像である。釈尊の降誕会を祝うことが、生命の根源、即ち聖なるものに対する畏敬の念がうちかわれ、そこから人間の尊厳も愛も生み出され真の幸福がもたらされるようになり、讃仏（人）が人々にうるおいを与えるような運動になっていかなければならない。人々は仏教といえは釈迦が開いたと答え、釈迦といえは仏教を開いたと答える。又、多くの仏教書が今日売れているようだし、仏蹟を訪れる渡航者も年々ふえてきている。

しかし今日の寺々では釈尊を讃えることが失われつつあるようである。

花まつりこそ生命を讃える日である。コンピュータ時代にふさわしい、人間復興を考えることが今日的課題であり、人々に情緒の世界を与える美しい花まつりを行うことが望まれるのである。

△私の座右銘▽

煩惱のうすきあつきも顧みず、罪障の
軽き重きをも沙汰せず、唯だ口に南無
阿弥陀仏と唱へて、声につきて決定往
生のおもいをなすべし



信 大 水 吉

(市浦三川奈神)
(職住院養天)

人生行路に於ては、種々阻む困難な紆余曲
折の問題があり、人生航路には風波時に起り
容易ならざる、動揺になやまされることがあ
る。それを処理し乗り切るための、精進努力
をなさねばならぬことは、いまさら申すまで
もないのである。

日常生活における、諸の煩惱は誰れしも持
ちあわせて、苦悩にさいなまれている。これ
を克服してよりよき生活にいそしまねばなら
ない。

人間は真実に生きることが、生れがいある
生活であるといわれているのが常識である。

ここに座右銘が必需になってくるのであ
る。我が座右に備えある、聖句、名言、詩歌

等、朝な夕なに眺めて、人生に生きる指針と
なし指導として、その文字眼光紙背に徹し、
心の糧となし暗黒を光明に打開出来るように
なるのである。

壁にぶつかるとか、行きずまるとか、進退
きわまるとか、そんなことにかかわらない。
その時手近に見聞する座右銘、口すさむこと
によつて活然として心境が決するのである。

座右銘としては扁額でも条幅でも色紙短冊
でもそれを揮毫することが出来る。

座右銘の一つとしては、床に掛けられた、
法然上人画像上賛に、増上寺堀尾貫務大僧正
が師匠の依頼により、

『煩惱のうすきあつきも顧みず、罪障の軽

き重きをも沙汰せず、唯だ口に南無阿弥陀仏
と唱へと、声につきて往生のおもいをなすべ
し』

と謹厳なる筆致で、したためてある。
法然上人（大胡消息）のお法語である。法
然上人の尊容を拝し、そのお法語を拝読する
度に有り難く座右銘として頂戴させていただ
くのである。

人間が罪の自覚、自己の価値を信ずる即ち
信機が、念仏信仰の先ず確立条件であること
当然であり、而して南無阿弥陀仏と念仏す
る。即ち信法と念仏信仰が明かになってくる
のである。念仏は口称念仏のことで、称名で
あることは申すまでもない。

声に表わすことが真実である。善導も「念声是一」とお示しになっている通り、念仏の實踐は声に出して称名することが究極である。

声に表現することは身口意三業の一致と想うのである。信仰の眞實が得られるのである。声について決定往生の思いがなされる強さがひしひしとせまるのである。

この法語が座右銘として確固不拔の教である。

○

震災で倒潰した庫裡の居間に掲げた、横額に『摩頭三省』旭堂書があつた。師匠の座右銘としてあつたのを覚えていた。

自らの生活行為について、常に反省するところがよりよき力となるのである。頭に手をあて、三度も省みることの慎重さは、何ごとにも必要であるばかりでなく、信仰についても特に重要な、自己の機根即ち罪の認識、三省して信仰を深めることになるのである。

この一語は四字であるが、受け取り方によつては、非常な意義を顯わし、精神的な活躍

の源泉となるのである。

○

青年に求められての座右銘は色紙或は短冊に揮毫することになっている。

象山の歌『うきことのなこの上につもれかし、かきりある身の力ためさん』

南洲の歌『うきことのまれにしあれば苦しきを、常と思えば楽しかりけり』

青年らしい意気と反発的な行動に打ち勝つ力を養う強さを実行する、象山の實踐力を深めるのである。更に南洲の、苦悩を常に喜びと受けとめ磨きをかけることが、人間形成を成し遂げんとする忍耐と精進とに努力が肝要になる、青年ばかりでなく、自己の人生にも役立つ歌の精神なのである。

○

女性に贈る色紙には、座右銘として『和顔愛語』と書くのである。

この語は誰れにも尊いことだが、特に嫁ぐ女性の一生を通じ、珍重すべきものである。一家の和と、いつくしみ愛の言葉によって含蓄ある、内容を味うときに、明るさと親し

さが渾然となつて円満する、家庭がかし出されるのである。真に味読すべき座右銘なのである。

檀家の或る未亡人が六人の子供のある漁貝商の家に再婚したのが、三年前であつた。世人は不安の感を深くした。しかしその女性再婚の砌、なき両親と亡夫の位牌を仏壇に安置することになった。月一回命日に回向を依頼され訪問をした。

初対面の挨拶の際、和やかな姑の母、主人子供達の家庭の雰囲気、すばらしさを感じたのである。ふと床に懸けた条幅が目につく『感謝して、今日もにこにこ働きましょう』と子供にも読める文字である。これが家庭和樂の座右銘であることが解つた。

一家九人の一族の平和と家業との、喜びを味つておられる、この事実を確認したのである。座右銘が家庭生活の基調となつていたのである。

座右銘は画一的なことではなく、各人自由な好みにより、實踐にふさわしい名言を決定して、真に人生の伴侶とすべきである。

頃の花



梅一輪一輪ごとのあたたかさ

梅の一輪、一輪が咲くごとに春のおとずれを教えられる。
やがてやわらかい日差しの中に桃の花が開き、そして、

奈良七重 七堂伽藍 八重ざくら

と、桜の花が満開となると、春はたけなわとなるのである。
この頃お釈迦さまの降誕会「花まつり」がやってくる。

花祭見聞くもの皆光り待つ

象の綱伸びてすすめり花祭

春の花で飾られた花御堂、その中にりりしく立つ「天上天下唯我独尊」と申されたという誕生仏、それに甘茶をそそぐ。釈尊が花の園で生れたとき、竜王が空中より香水をそそぎ、その体を洗浴した因縁にもとづくこの風習も最近では何

長谷川 宣丈

(神奈川県横浜市在住)

か形式的になりすぎたきらいがないでもありません。

それでも仏教系の幼稚園等で行なわれている花まつりは子供達にとって身近かに感じられる行事として親しまれているようです。

花御堂といえはひと昔前は野に咲くれんげやたんぽぽなどで飾られた屋根がほとんどであった。一見粗末な感じがしないでもないが、はだかで立つお釈迦さまにはにっかわしい花々であったという記憶が残っております。

しかし、今日では採りたくとも採れない花となりつつあります。ましてや都会地の子供達はれんげやたんぽぽを知らないといっても過言ではないでしょう。田舎の子供達でさえ、私達が幼いころれんげで作った花輪を飾り遊んだ頃とは異なり、そのれんげを見る機会さえ少なくなってきたのであります。

春ともなり、田舎を走る列車の窓よりれんげと菜の花の織

りなす赤と黄色の花ジュウタンを見る様は何ともいえぬ心地がいたしました。この頃ではやはり少なくなってしまうました。時の移り変りといってしまうえばそれまでであります。が、その様子を知る人々にとっては心淋しいことに違いありません。

花といえは花見、何か私たちにひと時のやすらぐを与えてくれます。古くは水戸の偕楽園、最近では熱海の梅林に代表される観梅から始まり、その中に早春に思いをさせ、やがて桜の花が開らく頃になると私の周囲も自然はなやいだものとなりますが、最近の都会周辺ではそのみごとに花はあまり見当らなくなったことは何んとも淋しいことです。

桜の花は日本を代表する花であったはずですが、今世界中で一番見事に桜の花が咲いているのはアメリカの首都ワシントンの記念公園の河畔とのこと、何んともいえぬ心地がいたしますし、なさけないの一言につきます。それでも昔ながらの桜どころ、吉野山などはその名に恥じないところでしようが、私たちの身近かでその美しい花びらを春風に乘せて散らせた木々は一本一本と無残にも枯れ、冬そのままの姿を見せているのが今日この頃の有様です。

先日、テレビを見ておりましたところ、柳家小さん師匠が「長屋の花見」という落語を例のおとぼけをまじえ熱演して

おりました。大家さんが自分の長屋に住むまじしいながら実に生活している店子たちに花の季節ぐらい大きな気持を持つようと、花見にさそうのですが、お酒のかわりに水でうすめたお茶を、卵子焼きのかわりにタクアンを切り、花見に出かけるのです。店子はお茶を飲みながらよった品を作り、タクアンを音がしないように食べ、他の人々が酔い歌うのにあわせ、ふるえながらいかに酔ったようにふるまうという話しです。

この話しもフィクションといってしまうえばそれまでですが、何か江戸時代の人々の生活の一端をみることで、なんともいえない情感を味わせてくれるものです。それにひきかえ今日の生活様式ではとてもこのようなひと時を過すことはできにくくなりつつあります。

四月、それまでの寒さを一気にふきとばすかのようには百花爛漫咲きみだれるのですが、それでもこの頃ではこの季節感も何か感じられなくなってしまうました。花のみのことではありません。食物にも季節感がなくなっております。考えようによっては自分の求めるものをすぐに手に入れられるかも知れませんが、人本来の情感、生活の情緒などあまりにも失ないがちなこの頃です。子供たちに聞いても例えば菊の花は一年中咲く花と理解しておりますし、椎茸も同様一年中取れ

るものと思つてゐるようです。

つい先日日比谷花壇に立ち寄ったところ鉢植のスズランを売つておりました。西ドイツ直輸入のものだそうですが、この温室育ちのスズランを見ておりますと、何か花に同情したくなるような狭い中で精一杯咲いてゐるのです。

生命、人も動物も植物もその長短はあるにしても因縁によつてこの世に命を持ち、その命をより有意義なものならしめんとしてゐるのです。自分に与えられた範囲内で最大の力を發揮し、夫々自然に立ち向かい、一つの生命を大事にしなればならないのは言を待たないでしょう。

昔の人はきびしい自然に立ち向うために、実に考えた生活をしておりました。今日とて同じでしょうが、より良き生活を目指すため更に飛躍せんとしております。

しかし、その結果たしかに生活は楽になりましたものの、前にも述べました通り、情緒を失ないがちです。自らが作り上げたより良き生活に、逆に首をしめられないともかぎりません。より高度の發達を遂げ、厳しい自然を支配した科学・文明その中で生活する私たち。しかし自らの利益のためのはずであつたこれら科学・文明にふりまわされてゐるといっても過言ではないでしょう。

人はこのようなとき、何を感じ、何を考えながら生活して

いのでしょうか。物質的な条件がすべて満たされたとき、次に求めるものは何んでしょうか。それはボカンとあいてしまつたような精神的なささを求めるようになるのではないのでしょうか。

生活に何ら不安がなく、求めるものすべてが得られたとしても、その中に生じる虚脱感ともいふべき一抹の不安をいなくようになるのです。

今日の流れを見ておりますと、何ら不自由ない生活が逆にわざわざいとなり、ある人は蠟人形の如くただその流れに遅れまいと歩き、ある人はその捌口を理由なきものにぶつけ、またある人は自分はすべてに達観してゐるかのやうにそのやうな行いは下劣だときめつけてゐる。こんな生活ばかりではないでしょうが、今日の様子を見るにつけ憂うのは私のみではないと思ひます。

変し飛躍しますが、これすべて精神的、いいかえれば宗教的な情操に欠けてゐることではないでしょうか。静かに流れを見きわめる時間を各々が持ち、その中に人としての生活のあり方を考えることとて必要でしょう。そんな時その一輪を見たかぎりではただ可憐な桜も、数そろい満々と咲ききそうさまは見えてゐると何か氣持を大きくさせられる氣がいたします。

人として同じでしょう。生きることと喜びと同時に、花の如く自然に立ち向う姿勢を物質的、精神的共に素直に持つべきでしょう。

花の話しからとんでもない方に脱線いたしました。花と同じことがいえると思います。花は本来の姿としてかたくなにとじた蕾から色あざやかな花びらをあらわし、私たちの目をたのしませてくれ、そして短かくも精一杯咲きみだれたのち、散っていくのです。

しかし近頃では、ホンコンフラワーに代表されます造花がその手軽さも手伝ってものではやされ、最近に至ってはドライフラワーなるものまで作られるようになりました。自然の花のさかな頃をみはからって乾燥させ、更にそれに人工着色し、原型に近い色合いにさせるものですが、確かにこの花は長く咲くでしょうし、買い求める時は少々高くとも経済的かも知れません。けれどすでにこの花は生命をうばわれた、精神をスポイルされた虚像にすぎないのです。

前にも触れました通り、今日では求めようとするものすべてを手に入れることができますが、それらの中には虚像のものが多分に含まれております。これがいけないというのではありませんが、それを取り扱う人としての心情が最近ではとみになくなってきたように思えて仕方ないのです。あま

りにも簡単に手に入るからこそ、その手に入るまでの事象に無頓着になりすぎているのです。礼を尽す精神的なもの、感情がスポイルされているのです。

二月の末、鎌倉にある老僧をたずねた折、その庭前にしだれ梅が今をさかりに咲きみだれておりました。老僧にその見事さをほめましたところ、老僧曰く、「いやこれが本来の姿なんです。昔の人は厳しい自然の中に自分の立場を示さんがために努力をかさねて来ましたが、最近ではその自然をある程度コントロールできるようになった人々が、そのものをも更に征服し、その生命をもうばわんとしている。これではいけない。弱肉強食の時代はもう終わったのです。人にかぎらず自然万物をもいたわる気持が今こそ必要な時代に入っているのです。即ち今様にいえばモラル、私たち老境に入ったものからいえば宗教情操的な心情を持ち合わせるべきでしょう」と、いわれておりました。すべてを見尽したこの老僧のことばは私をばげしくうちました。ある年令を経て得られる心境でしょうが、こうした心もちを人すべてが持ち合わせることはできたならばどんなに仕合せなことでしょう。

ここにはじめてゆとりある生活、生命を活躍行動させる根源が生れてくると思います。こんなことを思いながら、今年も花咲く頃を迎えております。

十二因縁

—その4—



真実の心（名色）

渋谷 賢 応

（長野県茅野心光寺住職）

識の次には名色を配せられています。先にも申し述べましたように、十二因縁中の識とは迷界の主体として提示せられたものでありまして、主観の中に潜在する自我とでも申しましようか。それに対して名色は、その自我の主観を通して見る客体とも言うべきものであります。したがって、この識と名色とは相依相関性のものと申すべく、この意味よりいたしまして同時に考えられなければならない同時因果とも言い得るわけです。

またこの名と色でございますが、名とはものの名前と言うことでして概念性のものであり、色はそのものの色あいと言うことでして、質料性を申すものでございます。主観として

の識を以て外界を眺めますときに、私たちは、馬を馬と見、車を車と見ます。そればかりでなく美しい花は美しいと見、おいしい果物はおいしいと感じます。これらが私たちの生れながらにしてもつ感覚によって、生れるより今日までの教育、経験によって、私たちの頭の中に形作られた概念と申すべきものであるわけです。馬を一度も見たこともなく、教えられることもなかった人が、馬を見ても何かわからないでしようし、車に一度も乗ったこともなく、乗るものだと教えられたこともない人が、車を見ても車とは何なのかわからないでしよう。私たちが馬を馬と見、車を車と見ると言うことは、私たちの頭の中に、すでに馬とか車とか言う概念があるからこそそのように見えるわけです。これが「名」と言うことでして、自分の主体である「識」と、客体である「色」とを結び合わせてくれるものなのです。

それでは「色」とは何かと言うに、馬なら馬のそのものを言うわけでして、車なら車そのものを指すわけです。つまり客体の質料とでも申しましようか。

このようにして私たちはいろいろなことを認知するわけですが、重ねて申しますようにこの十二因縁は迷界の因縁です。したがってこのことは間違った識と名色の因縁と言うことでありまして、識が本来無我なるべき主体に自我を想定

し、定着することから迷界が発するように、この迷界の識によつてとらえられる名色もまた迷界の想を転ずるものと言わなくてはなりません。

實際私たちがとらえている外界のいろいろなことがらは、この「名」にしろ「色」にしろほんとうのものであるか、真実なものであるかと言うと必ずしもそうとばかりは申されません。頼みにしていたことが次ぎ次ぎと外れ去り、信じきっていた人にも裏切られることが少くありません。このようなときに私たちは、私たちが頼みにしていたことが間違っていたのか、外されたそのことが悪かったのか、信じていたことが間違っていたのか、裏切った人が悪いのかと反省するわけです。つまり「識」につながる「名色」をふりかえって考えて見るわけです。

よくよく考えて見ますと、外界のいろいろなことがらをこのような目で見ると、頼りになるものの方が少く、間違っているものの方が多いのに気づかずにはおられません。ここに根本的なあやまりがあるようにさえ思えてくるのです。

○

百喻經に次のようなお話がございます。

「昔、二人の人が道を歩いていました。一人は車を引いて行きましたが道の悪い所につき当り、前へ進むことができな

くなつてしまいました。車引きは歩いている人に言いました。『どうか車の後を押していい道に出るようになしてくれな
いか』歩いている人は言いました。『そうしたら俺に何かくれるのかね』車引きは言いました。『無物を君にあげよう』
『よし、そんなら押そう』

そう言うことで後を押し、車は無事平地に出ました。後押した人は言いました。『約束の品をもらおうではないか』『約束は無物だよ』『だから無物をもらおうではないか』『無物なんだよ』『君は僕に無物を約束した、きつと無物と言うものがあるにちがいないではないか』

このたわいもない話の次にこのように説明しておられるのです。

「歩いている人が無物と言うのは、無いものを有るが如く考えたと言うことなのです。世の中の愚癡の人たちは、無いものを有るが如くに考えて虚妄のことをたのみとします。車引きの無物と言うのは無相、無願、無作、すなわちさとり
の境地です。道ずれに困った車の後を押して人を助けた快
さ、それは物品に代えられるようなものではないはず
です。この心こそ、ほんとうの慈悲と言わなければなら
ないものです。」

なるほど、そう言う説明をお聞きすればこのお話もわかる

ような気がします。

私たちが子供を育てるとき、私たちの老後のことを思つて育てるわけではございません。可愛いのが故に育てるのです。自分がどんなに苦勞をしても、この子ばかりはと思つて育てています。この限りにおいては、親心は仏心に甚だ近いと申されています。しかしながら、子供が成長し、独立し、一家をなすと小さい時に育て上げたその時の慈悲心にやや變化がきざします。無物を求めて子を育成しながら、『われに無物を与えよ』と言うような考えが頭をもたげます。ここに迷界が生じてくるようでございます。

迷界の識にともなう名色とは、このような虚妄の概念と、虚偽の実体把握とによつて生ずるもの、言いかえれば間違つた考えで外を見るから間違つた面しか見えないと言う關係を言うものでして、このことを正しく見きわめることによつて眞実なるものへの到達の道が開けるものと申さねばならないわけです。

○

法然上人は「至誠心」と言うことを説明せられております中に次のように申されています。

「至誠心といふは眞実の心なり。その眞実といふは、身にふるまい口にいい心におもわん事、みなまことの心を具すべ

きなり。すなわち内はむなしくして、ほかをかざる心なきをいふなり。此の心は、うき世をそむきて、まことのみにちおもむくとおぼしき人々の中に、おほく用意すべき心ばへにて候なり。」

眞実の心と申すのは、内にむなしく、言いかえますと何も求むる心なく「外をかざる心なきをいふなり」外見をかざる心のないことを申すものですとさとされています。そしてこの心は、仏道を修行しようと思う人の、特に心得なければならぬ心ですと念をおしておられます。そしてその結びに

「されば詮ずる所は、ただ内心にまことの心をおこして、外相をばよくもあしくも、とてもかくともあるべきかとおぼえ候なり。おほかた、この世をいとわん事も、極樂を願はん事も、人目ばかりをおもはで、まことの心をおこすべきにて候なり。」

と申されております。

外見をよくかざりたい。人目をよく見せたい。このようなことはまさしく迷界の名色であるわけです。このような有相の想いの中には眞実の心のやどるはずもなし、また、外界を眞実の姿でとらえると言うようなことができるはずがないと申されているのです。慚愧、まことに頭を垂れて拝聴するのみでございます。



人身受け難くして

小 柳 晟

(東京都江東区在住)

今、私の自慢出来る事は何んであろうかと時々考える事がある。何等物質的な宝も持合せぬ私だが、唯一つ誇れるものがある。浄土宗信徒としてのそれである。それにつきる。浄土の法門を聞いてより、数年を経たのであるが、今日、仏縁というものを、しばし考えて見る事がある。私が浄土の法門を叩くに致った直接の因は、子供を亡くした事である。そして菩提を弔うべく御縁になったのが浄土宗寺院であった、私の家は曹洞宗である。然し、直ぐ飛込んだわけではない。宗祖を知り、宗義を知る為宗門の関係書に目を通したのである。

そして、私は大きな発見をした。元祖大師法然上人である。その一言一句に驚きの目を睜ったものだ。私が今迄に見

聞いた僧侶の中にも、これ程私を感動させて呉れた上人はおらなかった。世の中には偉い上人がおられるものだ、失礼な話だが、この方は嘘をつかない、真実を語る方だと、そう思ったものである。それ即ち、「造像起塔をもて本願とせば、貧窮困乏のたぐひはさだめて往生ののぞみをたつに、しかるを富貴のものはすくなく、貧賤のものはなはだ多し……云云」という勅修御法の中の一文である。これは当時の日本中を泣かせた言葉だ。私はこの御文章を拝する時、思わず、身体中が熱くなるのおぼえたものである。当時仏教に魅せられたというより、浄土の法門にというべきだろうか、仏書を飽くことなく読みふける私を見て、周囲は長続きはすまいと思っておったであろう。事実私は熱しやすく、冷めやすい性質で

ある。その私が今日迄ついて来られたのは、浄土の法門が勝れている事は勿論の事、やはり元祖大師法然上人の示唆に安心して、私身をまかせる事が出来るからに違いない。私は固く信じている。即ち阿弥陀如来に全てをおまかせする事に帰着する事になる。

私は、親鸞上人がうらやましいと思う事がある。あれ程迄に元祖大師に心服出来た事を、今われわれは昭和の法然上人が欲しい。然し無理な話である。だが元祖大師の残された法は、現在毅然として輝いている。朝に一紙小消息を拝し、夕に一枚起請文を受く、これにすぐる喜びはない。

私は昨年十二月実母を亡くした。そして三十数年振り生家へ戻り、兄弟姉妹と一つ屋根の下、枕を共にしたのである。

実は私は生れると直ぐ養子に出されたのだ。今生に於いては縁しの薄い母と子ではあった。然し私は母の枕辺で何の蟬りもなく、御念仏を唱える事の出来る今の自分を有難く思っている。四十九日の法要で再び、伊豆へ出掛けた。早春の伊豆は、山椿の色が鮮かである。都会の騒音の中に、ふと自身自身を見失いがちなわれわれは、こうして自然の中に身を置く時、今、自分は生かされているのだなあと、つくづく感じる。澄だ空気、鳥の声さえ楽しげに聞える。限りなき自然の力無量のはからい、そうか南無阿弥陀仏南無無量寿如来と

は、この今の気持かな、と思つて見たりする。

その晚法要が行なわれたのであるが、ふと気がついた事がある。僧侶の読経の後、一同に修証義（曹洞宗である）を読ませるだけで、別に法話とてなく、おさなりの儀式で済すという事は、他宗ながらこれで良いのかと、考えさせられる。修証義とて、はたして何人の者がその真意をくみとっているのか、大内青密の名文も泣こうというものだ。だが他人事ではない。今日の浄土宗の現状は如何ばかりか。

私は各住職方に問いたい。「貴方のお寺のお檀家の方で、はたして何人の方が、元祖大師をご存知でしょうか」と、重ねて問いたい。少くとも「浄土」をお読み下さるお寺さんには、その疑懼はあるまいと思うのだが。

今総本山知恩院では、全国的に「おてつぎ運動」を起している。私も会員の一人である。スローガンとして、「家の宗教より個人の信仰へ」とうたっている。私は個人の信仰より家族ぐるみの信仰へといつて見たい。自信教人信難中転更難と申すが、真に人をして信を教えしむるは、大変な事である。私自身信仰とは、人に無理強いするものではなく、自から求めて行くべきものと思つている。故に私は人にすすめる事はない。仏教の本質を（浄土門の）知って貰えばそれだけで十分だと思つている。菩提心を起させる事は必要であらう、

しかし難しい。元祖大師も、しみじみと述懐せられている。大乗仏教の本位からすれば、もっとも大切な事であるのだが、要はその下地を、如何に作るべきかという事か。私自身未だに仏教の本質の何であるかを掴み得ておらない。

浄土宗の檀家たるもの、元祖大師法然上人を知る必要がある。いや知らなければ、けっして浄土宗檀信徒だなどと、いった義理ではない。少なくとも各家庭に、勅修御伝法然上行状画図の一開位は置いて貰いたいものだ。いや置くべきだ。そこで初めて檀信徒たる事が出来る。

私は時々菩提寺の住職と酒をくみかわす事がある。酒といえば般若湯などといって、飲んでいる者があるがもっての外だ。酒は酒である、これを般若の泉にするも、狂水にするも、己れの心掛一つである。般若湯などと己れをいつわって飲むべきではない。話は外れたが、住職と浄土の法門のみならず、仏教の話しを始めると、時の経つのを忘れてしまう。時々子供との約束を忘れて怨まれる事がある。然し私にとっては何よりの楽しい時間でもある。寺とは居心地の良いものだとは、私の一人よがりでもあろうか。そして、当然若人に対して、如何に仏教の本位を教えるか話題となる。そこへ来ると、はたと、議論が止みしばし沈黙が続く。仏青会を結成しようとの話が出るが、なかなか良い思案が浮ばない。幸い

に、私の教区（静岡教区）でも、その動きが教化団を中心として出て来た事は、なによりのことだ。もっとも焼津に「ありそみ会」という素晴らしい仏青会があるのが、心強い限りである。

浄土宗信徒として、教化して行く上において、色々と方法があろうが、どれが一番良い方法か非常に難問である。

先ず宗門より入って、通仏教に抜け、再び宗門に帰えるべきか、通仏教を通して、宗門へ入るか、いずれが良いか非常に迷う。特に現在の青年に対しては難しい問題であろう。しかし、そのいずれにしても、当事者の努力こそ肝要かと思われる。

さて、浄土宗信徒として、必ず守らねばならぬ事がある。それは、各家庭の仏壇に必ず御本尊を祀る事である。これが案外行なわれておらないのだ。仏壇とは、仏像壇の事である。位牌だけでは仏のおらぬも同然である。位牌壇にしか過ぎない。死んだ人が仏様など思い上りも甚しい。そんな事を知らぬから仏教が若い人に嫌われる因となる。要は阿弥陀如来を祀る、御本尊様を安置するという心こそ肝要である。私達も高価な仏像でなくて良い、住職に書いて頂いた六字名号即ち「南無阿弥陀仏」の名号でよろしいのだ。

御仏の法を受し 己が才は 今生さるを たゞよろこばむ



阿弥陀仏は本来的には人間のものであるところの理性や愛の唯一の所有者となる。阿弥陀仏が完全なものになればなる程、人は不完全なものになる。信者は自己のもっている最善のものを阿弥陀仏に向って投射し、かくて自分自身を貧困にする。かくて阿弥陀仏は一切の愛と叡智と正義とをもち、信者は能力を奪い去られた空しい惨めなものになる。信者は阿弥陀仏に向って投射してしまふ時、力は一信者から離れて行く。信者はよって自分から一切の良いものを奪い去ってしまう故に必然的に自分を「罪人」と感じ、そして神の憐れみと恵みによってのみ初めてかれをして真の人間たらしめるものを再獲得しうるのである。

阿弥陀仏信仰

権 藤 俊 光

上記の文章はフロムの「精神分析と宗教」からの抜粋です。ただ神と書いてあるところを阿弥陀仏と書きかえたものです。そして書きかえてみて自分自身恐ろしくなっていました。我々が信仰している、阿弥陀仏は本当にこのようなものでしょうか。これではまるで阿弥陀仏は権力の象徴であり、その信仰は権力への屈従でしかなく、自己喪失ではないか。しかしこれはあまりに軽率な考えに走りすぎてしまったようです。浄土宗をフロムの概念を使って性急に独断してしまったようです。それでは阿弥陀仏とはなんなのでしょう。阿弥陀仏信仰とはなんのでしょうか。ここでもう一度フロムにかえってみたいと思いま

す。フロムは宗教を全く強引に権威主義的宗教と人道主義的宗教の二つに分けています。権威主義的宗教では人間が自分の外にある自分を超えた力によって支配されるのである。礼拝し服従し畏敬する理由が、神の道德的特性や愛やその正義にあるのではなく、神が支配力をもつ、即ち神が人間を支配する力をもつというのである。ここでは最高の善行と考えられるものは服従であり、根本の罪は不服従である。神が全知全能と考えられるのに対して、人は無力で賤しいものと考えられている。完全な屈服によって神の恩寵と助けとを得る時にのみ人は強さを感じ得る。強力な権威への服従という事は、孤独感と有限感とから逃れる一つの通路である。服従の行為によって人は自分の個人としての独立と誠実とを失うけれど、しかしそこでは人は、畏敬をおこさせる力のいわば一部となつて、その力によって守られていると感じ取るのである。人道主義的宗教とは人間の理性を發展させて、自分自身を、他の人達との関係を、そして、宇宙における自己の位置を人間の有限性を諒解すべきである。人間は自分の諸制限

と諸可能性との両方に関して眞実を知るべきである。人間は自分とそして他の人達のために、愛の力を発展させるべきであり、生きとし生けるものの尊厳を体験すべきである。このようにフロムは權威主義的宗教と人道主義的宗教を説明しています。そして私は浄土宗教を權威主義的宗教の概念にあてはめたのです。しかし冷静に考えれば、二つの概念のいずれかに押しこめるといった方法は間違っていると考え直しました。この二つの概念は宗教の両極端をあらわしていると理解しなければならぬのです。人道主義的宗教といえども、健康な人が常に病氣にかかる危険があるように、自分でない他の力によって支配され、愛と自由を失う危険がつきまとうているのです。

法然上人は自分を十惡五逆の法然房、自身はこれ煩悩を具足せる凡夫なりと自覺されているのでありますが、これは先に述べた權威主義宗教の場合のような罪の意識からきているのでしょうか。否決してそういうことはないでしょう。法然上人の自己洞察の深さ、自分自身を阿弥陀仏の明鏡に照らして、自分を

さらけだしてみる。そこで、人間の無力性、有限性にぶつかられたのであります。つきあたらざるを得ないので。こういった自己反省・自己否定が、法然上人自らを、十惡五逆の法然房・愚痴の法然房と言わさしめるのであります。これはまさしく人道主義的宗教の罪の意識にあてはまります。そしてこの罪の意識が出发点なのであります。法然上人が生きた時代は戦乱のあけくれであり、法然上人の父親の時国も明石定明の夜襲で殺され、母親とも幼年にして死別されたのであります。こういった苦難に満ちた生活の中でも打ちひがれることなく自分をきびしく見つめられたのであります。こうした世の中で仏教は一部の特権階級のものだけにあり、多くの庶民は毎日を何んの目的もなく悲惨な生活を送っていました。法然上人はこれらの一般庶民に目を向けられ救済の手を差しのべられたのであります。私はこういったところに法然上人の限りなき、人類愛とも言える行為に魅力を感じるものであります。法然上人はまさに人道主義者でありその宗教は人道主義的宗教であります。阿弥陀仏は無量寿、無量光

の意味です。それは限りない寿命であり、限りない光明であります。大宇宙そのものであり、真理そのものであります。大宇宙とは空間的・時間的に超越したもので、つまり空間的宇宙と過去・現在・未来を「一」とするものであります。阿弥陀仏は慈悲であり、愛・自由・正義・寛容・真理の象徴であつて、權威の象徴ではないのであります。權威の象徴であつてはいけなくてであり、我々はたえずこのことに心を配ばらなければならないでしょう。我々は愛・自由・寛容をなくして、ただ狂信的に自己を犠牲にしてまで自分の属する教団に埋没する人々や教団を見ることができます。そして浄土教団においても、一部ではあるがおなじあやまちをおかそうとしているのを見かけます。阿弥陀仏は慈悲であり、愛・自由・正義・寛容・真理で、その信仰も又慈悲であり、愛・自由・正義・寛容でなければならぬのであります。

信仰の敵は懷疑ではない

信仰の敵は盲信であり狂信である

——フロム——

(ハガキでひとこと)

春によせて

工藤昌瑞

(青森県弘前市西光寺住職)

戸松先生からの年賀状に「庭の落のとうの青さが忘れられない」と書き添えてありました。北国の人の、春待つ心は痛切です。深雪も、三月ともなれば、地熱と陽光に攻められかきねの辺りに僅か許りですが、土肌が見え、そこに青い雑草を見つけます。

まだら雪ともなると落のとうが姿を現わしそうになると春は我々のものとなります。落のとうを採って、こんがり焼いてお汁に放し



ますと、ほろ苦い味と春の香りがして来ます。併し今はそんなことも少なくなって来ました。弘前は古城と桜と喬松とで、その豪華な桜まつりを世界に誇っています。梅・桜・桃等百花将に爛漫です。その春の最中、旧八師団が建てた忠霊塔が戦後仏舍利塔となって、毎年各宗輪番で英霊法要が営なれますが、今年には浄土宗当番で、大野法道大僧正を導師に盛大に行われんとして準備中です。私らはお念仏によって英霊への追悼を捧げんとしています。

遠田弘俊

(東京都文京区慈眼院住職)

春といえど何となく心の浮々とした季節であり、物みなが生き生きとした容相を呈する頃と思えるのです。しかも何か先きのながいまだまだあるんだと言うような気もするのが春の心であるように思う。

然し、私は何か知らず春よりも秋の風情が好きである。宗内の行事を見ても春と秋とに自らの趣きがあつて、それぞれのよさもあるけれど、春にはただお祭りの事が多くて何となく自分の心を反省する静けさが乏しいように感じられてなりません。

さればとて春なければ夏もなく、秋も来ぬでしょう。その意味で春は春ながらに春をいかし、秋への営みを忘れたくないものです。法然上人のお歌に「さへられぬ光もあるをおしなべてへたて顔なる朝霞かな」のお心を拝すると、月影の御歌と対しまして、春の心のおもしろさも亦悪くもないかと存じますが。

若麻績 侑 孝

(長野市善光寺測之坊住職)

「信濃では月と仏とおらがそば」と一茶がうたっておりますが、一年のうちでもっとも華やいだ気分になるのはやはり春でしょう。

善光寺周辺は特に桜や杏並木が多く、満開の時などはまさに極楽をも連想させるものがあります。しかし、信濃の春が華やいだものになるのは、冬の永さがあるためです。

今年のように寒暖不順の年は特に三月中旬まで雪が残っていたりするので、四月に入り黒い土からかげろうがのぼり始めると、今まで押えられていたものが、一度に爆発したように梅、杏、桜の順で花が開き始めるのですが、ほとんど一緒に咲き始めるので春をいよいよ感じさせることになります。

春が待ち遠しいものであればある程、その到来に喜びも大きいのですが、人間の生活も苦勞して苦勞してつかんだ喜び程大きいことは当然です。そうしてみると苦を求めること

が喜びを求めることになるわけです。こんなことを考えて春を待っております。

瀬 高 哲 朗

(神奈川県藤沢市真源寺中)

梅に鶯とは云うものの、満開の梅も散り去って鶯の声のみが聞える今日此頃でございます。

先年、法事に招かれたお宅から道重大僧正が「声」をしたためられました布を頂戴いたしました。大僧正は称名念仏を書かれたものと存じますが、丁度その年、宮中の御歌会の題が「声」であったと記憶いたしております。

こんなお話しを受け賜ったことがございます。道重大僧正に御染筆をお願い致しますと希望の数より多分にお書き下さったとのことでございます。ある時大僧正に「こんなに書いて下さるとかえって自筆の価値が下りましよう」と申し上げますと、大僧正曰く「私如きものの色紙が人々に渡することは有難い。一

人でも多く有縁の人と結ばれたい」と。

大僧正が色紙を書かれることは仏法布教の方便であつたとしても、実に尊いことをしたいものである。

光 村 宜 子

(東京都中野区在住)

例年になく寒暖不順でありました冬にも別れを告げ、うらかな春の到来です。

新玉の年を迎え誓いを新たにするのは、いつものことですが、私は小学校の教員をしている関係上、矢張り四月を迎え、この月を一つの区切りにする方が何か気持ちの上ですっきりといたします。それは小さい身体に胸をふくらませ、大きなランドセルを背負い、親に手を引かれ、桜のトンネルをくぐって登校して来る新入生の姿を見るにつけ、ああまた一年が始まるのだという気持ちにさせられるからです。こんな四月、私はこの月が一年中で一番好きな月でございます。

闘争を止めよ(2)



つるた たんせん

その頃、王妃は身ごもっていた。ある日、王妃は王にこう訴えた。

「わたしは都の中で我が児を生みとうございます。そして叶うことなら、朝日の昇り初める頃、身に甲冑を着して武装した兵士が威風堂々と市中を行進する有様を眺めたいのです。そしてその兵士たちが刀刃を洗った水を飲みとうございます」

このとう突な願いに驚いた王は、

「妃よ、さような無理な願いを起してはならぬ。われらは梵達王のため国を奪われ、今はこのような深山にいて困窮している身の上ではないか。どうしてそんなことが出来よう？」

ため息を吐いて、思い止まるよう慰めた。

しかし、以前の王城でのなに不自由のない生活を回想している王妃は、

「王よ、わたしはこの願いが叶いませぬぐらいならば、死んでしまいとうございます」

と愚痴をこぼすのであった。

王は妃の途方もない望みに困り果ててしまったが、迦尸国の国師のバラモンは王とは長い間の親しい間柄であったので、ともかくバラモンを訪ねて一部始終を打ちあけた。

「王よ、一度、王妃に逢って占って見ましょう」

と快よくいってくれたので、王は妃をつれ再び国師の家を訪ねた。バラモンは王妃の相貌を暫らくつくづく眺め終ると、うやうやしく礼拝をして、

「王よ、およろこびなされよ。王妃は正しく大福德のある男児をはらんでいられます。拘薩羅国の世嗣にきつとなられます。しかし、このことは誰にも決して口外してはなりません」

と王に告げ、王妃には、

「王妃よ、心を安んぜられよ。あなたの望まれることを必らず果されるよう努力いたしましょう」

とはげました。

バラモンは梵達王のところへ行くと、王の顔をうち眺めてうやうやしく頭をたれ、

「大王よ、こういうことを知りたまわれよ。大王には今日よい徳相が現われております。ただ願くば、四部の兵（象軍、馬軍、車軍、歩兵の四種の兵）に甲冑で武装さし齒簿をいかめしくして市中を行進し武威を示し、刀刃を水を用いて磨きたまえ、大王は自ら出でられ、その壯觀を見たまえ、大王、若しこうしたまえば、必らず吉応ききしるしがございます」

と進言した。

すると、バラモンのことばによるこんだ王は、左右の家臣をかえり見て、

「バラモン国師のいうが如くいたせ！」

と命じた。

その翌朝、日の出の頃、梵達王は四部の兵の大軍を市中に行進させた。バラモンはひそかに王妃にこの有り様を眺めさせ、又、刀刃を洗った水を約束通り与えたのであった。

日頃ふさぎ込んでいた心もすっかり除き去ることが出来た王妃は、やがて月満ちて男児を産むと長生と名づけた。長寿王は長生が成長するにつれ武芸を教え、又、自分の最も特意とする音楽や琴を弾ずる方を教え込んだ、やがて長生が十歳の春を迎えた時、王は長生に、

「梵達王と我が国とは、祖父の時代より相い敵視して戦って来た。梵達が我が国を攻めようとしたので、兵をいためるにしのびず、わたしはお前の母と共にここに逃れておんみを育てて来た。今、若し自分らのありかを発見されたならば惨虐な王は必ず三人の命を奪うであろう。それ故に、お前はここからはなれて住み、父母をしようて訪ねてはならぬ」

と諄々といひふくめて去らしめようとした。梵達王に発見されると三人とも一度に殺されてしまうおそれが十分あったので親子のつきぬ名残をおしむと、父より琴を形見に授けられた長生は悲しみの涙のうちに父母の足を

礼し、詮方なく親子別々の所に住むこととなった。

それから後、長生は武芸はもとより文学、音楽まで日夜懸命に励み学んだ。

ところがその後、幾年か経って長寿王のかくれ家を密告したものがあつたため、狂暴な梵達王はいかつて王夫妻を捕えさせ、市中を引き廻した上、街の四つ辻で四つ斬にしてしまえと命じたのであつた。

父母が捕えられたうえ処刑される噂をきいた長生は肝をつぶすばかり驚いて、処刑の場へ急ぎ赴いた。その時、わが子の姿を遙かに眺めた長寿王は、氣も狂つたかのような大声で

「長生よ、長を見ること勿れ、長生よ短を見ること勿れ、長生よ怨を以って怨は息まず、長生よ徳を以って怨は息むなり」

と叫んだ。

王の叫ぶようなひとりごとをきいた役人は、

「王は、処刑されるおそろしさの余り氣が狂つて、たわごとを申されるのかっ」

とあざ笑つた。

「わしは発狂したのではない。智あるものは、わしのことばを悟るであらう。長生よ、怨を以って怨は息ま

ず、長生よ、徳を以って怨は息むなり」

と再び悲痛な声で叫んだ。

「王は、正しく狂われた」

多くの見物人はみな王が氣が狂つてしまつたと思つたが、長生のみは父の言葉の深い意味を理解することが出来たのであつた。

無惨にも四つ斬りにされた王夫妻の遺骸は、城の南方の林中に捨てられ番兵が見張りしていたが、長生は街で買い求めた酒を与え、酔いしれて眠つた隙に、拾い集めた薪で火葬にし手厚くほうむつた。それから、人氣のない林中に走り入り、涙もかれるほど泣きぬれ復酬の念に燃えた長生は、やがて調象師の家を訪れ、象を訓練し馭する方を学ぶこととなつた。王に接近するには、王の象車を馭する調象師となるのが、一番の近路であると考えたからであつた。こうして象を馭する方法を一心不乱に習ううちにも、淋しい時には琴を弾じ、美しい声で唱つて孤独な心を慰めていた。

或る夜のことに、宮城の象の厩舎に侵び込んだ長生は、月明りに照ちされながら琴を弾じ楽しげに歌っていた。折りから、りょうりょうと響き渡る妙なる琴の音と美しい歌声に、梵達王は夢見心地で耳をすませてききほれて

いた。

その翌朝、王はいつもより早く目を覚ますと、近臣に「昨夜、琴を弾じていたのは誰なのか、さがし出して召し出せ」

と命じた。

こうして長生は、琴と歌の妙技によって見出され、王の傍近く仕えることとなった。

りりしい長生は、王の心中をいつもよく推察して響の声に応ずるようにまめまめしく仕えたので、何事も長生でなければならぬほど、王に信任されるようになった。しかし、身分と名前とは勿論秘していた。

或る日、王は長生に象車を馭さしめ多くの家臣を召しつれて、山野に獵に出た。家臣はちりじりに四散して、獲物を追い始めた。王の象車はその跡を追った、

「童子よ、車を停めよ。わしはひどくつかれた。一休み眠りたい」

王は、車をとどめさした。

長生ただ一人を供につれ、樹の蔭に行き長生の膝を枕にすると、疲れ果てていたのか、すぐ王はぐっすり眠り込んでしまった。寝返ったはずみに王の護身用の長剣は、自然にするりと半ば抜けた。この容子を眺めた長生

はこおどりしてこう思った。

「この王は、わたしの怨敵である。天の与えるこのよい機会をのがしてなるものか。わが父母を殺し、国を奪った仇である。今こそ、わが父母の怨みを晴らしてくれようぞ」

いく年かの宿願、今こそ叶ったうれしさにさっと立ち上り、剣を抜き放って王の首を刎ねようとした。

その一瞬、長生はあの時の父の言葉を思い起したのであった、

「父は、死に臨んで私にいわれた。長生よ長を見る勿れ、短を見る勿れ、長生よ怨を以て怨は息まず、徳を以て怨は息むなり。父の言葉に違うのは、子としての道ではない！」

父の最後の誠めを思い出した長生は肌にぞっと寒氣を感じて、あわてて剣を鞘におさめた。

「ううむ」

王は物におびえたように突然起きあがると、顔も蒼ざめあたりを見廻した。

「大王、どうして、そのように驚かれるのでございませう!?」

「わしはいま、夢の中で拘薩羅国の太子、長生と名乗

って剣を抜き、わが命を断とうとした。わしは、おどろいて目を覚ましたのである」

「大王よ、この広い野原に、どうして長生太子などいましょうか。きつと山の神が、王を驚かしたのでございます。心を安うしてお休み下さい」

そういわれて、王は再び長生の膝仇ですやすや眠った。

長生は再び考え直して今こそ父母の仇をと、王の剣をさっとひきぬくと、王はその物音に驚いて目を覚ました。

その時、有無をいわず長生は左手で王の頭髮をむんずとにぎり、右手の剣を王の胸にあてて叫んだ。

「いかに梵達、今こそ、何をかくそう。拘薩羅王長寿の児、長生とはこのわたしである。お前はわが国を奪つたるのみか、わが父母を殺害した。今こそ、その怨を報ゆる時である。覚悟されよ」

胸にぐさりと、剣を突き立てようとした。

突っさに王は力まかせに、剣を持った長生の腕を払いのけた。大力の王に腕をしびれるほど叩かれて長生は思わず剣をとり落し、つかんでいた頭髮を放してしまった。

すると、梵達王は長生の足許に膝まづき、手と頭を地にこすりつけ、

「長生よ、わが命を赦せ、長生よ、わが命を赦せ！」と哀願するのであった。

「どうして、わたしが大王に命を赦すといえましょうか。大王こそ、わたしの命を助けて下さい」

実際、今では形勢がすっかり逆転してしまっていて、力の王と未だ小供にもすぎない長生王子とでは、相撲にもならない。王が長生を刺そうと思えば、いと易いことであった。

「長生よ、こうなれば、お前はわが命を赦せ、わしもお前の命を赦そうではないか」

こうして王と長生とは、歓喜に微笑しあつて、お互に命を赦すことを誓い合つた。

「長生よ、車を馭せ、われらは帰ろう」

「大王よ、はいただいま！」

王は象車に乗ると、長生は車を駆け走らせた。駆け走らすに従つて、山野に獲物を追うていた家来たちははせ集つて来た。

(続く)



山野井 杲琇

歴史への関心

最近、歴史に対する関心が非常に強いように見うけられます。何故なら歴史に関する書物が随分たくさん書かれており、さらに大きな日本史や世界史の企画が、いろいろな書店からいろいろな形で出され、それがまた予想外に売れております。こういう現象の中にも歴史への関心の高まりが反映していると見て良いと思いますし、あるいは映画や小説などを見ましても、随分歴史物が多いのに気づくからです。

それを一種のリバイバルムードという言葉で片づけてよいかどうか、そういった一面も確かにあるように見えますが、決して単にそれだけではないように思われます。その一つの理由としてわたくしが極最近に気づきました一例を述べてみましょう。

最近話題になっている「天と地」という海

音寺潮五郎氏の小説があります。この「天と地」という海音寺さんの作品はなかなか綿密な考証のゆきとどいた小説でありまして、歴史小説としても随分手の込んだものであると思われまゝ。海音寺さんは「天と地」とを歴史小説としてではなく、歴史としてお書きになったらしいのです。それを歴史小説として、わたくし達歴史を学ぶ者が読んでは申し訳ないことでありましようが、しかしそこにはまた歴史への関心という当面の問題について考える一つの材料もあるようです。つまり歴史小説をお書きになる方が、たくさんの方の目に触れる小説や新聞の中で論文まがいの歴史論をやっているということは、一般の小説の常識としては考えられないことなのです。

しかし逆に申しますと、小説とも論文とも

つかない歴史小説が流行するという現象の中に歴史への関心の根深さを感じるのであります。歴史を学ぶ者の一人として勝手な評言を許して頂くならば、小説としてよりは歴史叙述として、より多くの成功を博していると思えますし、又文学作品としては非常に優れた物であると認めるべきでありましよう。しかしこれについてはそれ以上立ち入る余裕はありません。

その外の例として井上靖氏の「風林火山」がありますし、特に八切止夫氏のマスコミにおける「川中島合戦」についての記載などは、歴史論文とするには余りにも妥当性に欠くものであります。

このような時にこそ、私達は歴史に対する見方を学ぶ良い時期のように思います。確かに歴史小説からでも、歴史の真実を読み取ることのできる可能性はありますが、しかしそれからは歴史の史実を知ることとはできません。わたくし達は、科学的歴史と歴史文学とを見別けることができるようになって欲しいということなのです。そして歴史とは如何なるものかを、考えて見たいものです。



ひとくち伝記(四)

裏から逃げた僧正さま

高橋良和

洛西の藪のなかをうすよごれた衣に略衣輪袈裟の僧が小走りに、そしてときどきあとをふりかえりながらおちつかないふりでいそぐのである。

その頃の京都の西の方はまだ開けず、御室の仁和寺の甍も市内からよく見え、東寺の塔などは周囲が田圃のなかにくっきりと影をおとしている明治三十年のある日である。

この僧はまた小柄な、そして鶴のように細い蒲柳の質のように思えた。ときどき息ぎれのする呼吸を調整するように道ばたの石に腰をおろして休んでいたが、やがてちょっとおちついたのか顔の血色もよくなって、ゆっくり石に腰をおちつけたようであった。

「わたしにんたという重い荷物を背負わすのだらう。本山

の法主を退いてやっとおちついて念仏を申すことが出来ると安心したとたんだったのに」

ひとりごとのように言っている。

一体何事が起こったろうと不思議なくらいであるが、この小柄な僧は一体誰であろうか、これが百三才まで長生し、近世の名僧として信者に慕われた知恩院第七十九世山下現有門主の若き日の出来ごとである。

明治三十年推されて京都百万遍知恩寺の法主に就任したが、その後長門の大西比西円寺に住し、百山をのがれて洛西転法輪寺に隠棲していたこの人のところにある日僧がきたのである。

「僧正さま、ただ今東京の増上寺は法主さまがなくて困っ

ております。隠棲中のあなたには申しわけございませんが、一宗の繁栄のために、是非増上寺本山に御入山いただきたいと門弟のねがいでございます。」

「いや、わたしなどの不徳のものが法主になるような器でございませぬ。その上身体が弱く、またこうして関通上人のあとの寺を守りたいと思います。」

「それもそうでございませうが、一宗のために。」

増上寺からの使いの僧は熱心に山下現有僧正にすすめたのである。

元来人徳あり、しかも気弱なこの僧正どうやら根気まけしそうになったらしい。しばらくするとたちあがって、

「ちよっと御不浄まで、しばらくお待ちを。」

というとすすと襦をあけて、隣の部屋に下ったのである。

増上寺の使僧はおそらく御不浄と思っていたのだろう。何分か、いや何十分か待っていたのである。

その頃この僧正は御不浄をすませると、廊下づたいに裏に出ると、庭をすすつとぬけで、裏の木戸をあけて外に出たのである。

「とてもじゃない、あのようにすすめられては。」

と思つて竹藪のなかをぬけて御室仁和寺のあたりまできて息をついたのであった。

このときに山下僧正はかく辞退して、増上寺の入山をことりつづけたのでこの使僧も仕方なく転法輪寺を辞すことになった。

然し山下僧正としては増上寺からのこの札に対してなんとかあいさつしなければならぬ、というので春になって東上することになるが、そのとき再び増上寺からの使僧と途中で出合いやむなく暫時の在山ということになるが、それから六年の月日が過ぎてしまった。

その間山下僧正は大僧正に任せられ、増上寺大殿の竣工、境内の復旧、法然上人御忌の復興などを行なつて明治三十五年五月を迎えるのである。

たまたまこのとき一宗管長の野上運海門主が辞任をするこゝになり、内務大臣はこの山下法主に一宗管長の任命をするのである。

山下法主にしては全く寝耳のはなしであり、増上寺法主でさえ辞任したい心なのに京都の知恩院に入山しなければならぬ。内務大臣の任命とあればやむないことである。

去るにのぞんで山下法主は増上寺本山の人々を自分の部屋に迎えて、

「わたくしはまことに身体が弱く、とても一宗の管長としての重責は果たせないと思います。今日この東京の増上寺

を去りますことはとうていこの世において皆様にお遇い出来る期待はありません。せめてその記念にわたしの遺品の品をお贈りいたします。」

というので、自分のもっていた器物一切を一山の道俗におくって東京を去ることにしたのであった。

この山下法主の知恩院入山については、主治医の島田吉俊氏も、またその信者である磯部少将も永遠の別れというので名残りを惜んだといわれる。

東京と京都の距離などは交通機関も発達していなかったときだけに、永遠の別れという気持ちをもつのも当然である。かくして山下法主は明治三十五年七月一日に入洛して、知恩院に上山するのであるが、この晋山式のあと門主となった山下大僧正はその感懷をつづつて扇面に自詠を記し、道俗に願っているがそのうたは、

衆生誦念必得往生と題して

あふぎなばかぜこそいづれ御名をよぶ人のうまれぬことは
りぞなき

とあった。

それから三十五年間知恩院に在山し百三才まで長生するのである。若き時代から蒲柳の質であったのに、この長寿は全く摂生のしからしむるところであるが、然し如何に念仏者の

生活がこうした長寿につながるかのよき範ともいえる。

平素はほうれん草のおしたしと、うどんを常食としたようであり、全くの念仏の生活であった。

大正十四年五月に長寿によって木杯を、そして九十四才のときにも木杯を、昭和三年は金杯を下賜されているのも歴任門主中ただ一人であり、如何にこの門主の功蹟が大きかったかを知ることが出来るというものである。

編集後記

◎四月、桜を筆頭に花の園はにぎやかとなり、ふくいくと芳ばしい香りがただよう。何んとなくうらかな心地にさせられる。会員の皆様もこの香りの中、夫々御活躍のことと思います。今年の増上寺での伝宗伝戒の寒行は例年になく多く八十五名もの加行僧が登山し、先月十二日に満行となりましたが、今後を大いに期待したいものです。

◎先月号二十六頁掲載の松川文豪氏稿「業をみつめて」の中、中段十八行目「実有とは永遠なるもの、無限なるものであり、仮有なものである」とありました部分の傍点のところは「仮有は有限なもの」の誤りでした。お詫び旁々訂正いたします。

◇ 浄土トラクト ◇

四季の寺まいり (再版) 安居香山著 価30・〒15

浄土宗のおしえ (五版) 宮林昭彦著 価30・〒15

一枚起請文をめぐって 村瀬秀雄著 価120・〒35

選択集私解 竹中信常著 価125・〒30

ものいう石 竹中信常著 価150・〒45

多数お申込みには割引いたします。施本にご利用下さい

発行所 法然上人鑽仰会 TEL (262) 5944
振替 東京 82187

村瀬秀雄 訳

新 刊

和文浄土三部経

新書版
204頁

附・法然上人撰「三部経釈」抄述

念仏信仰の聖典三部経の全訳

定価200円 送料55円

発行所 法然上人鑽仰会

TEL (262) 5944
振替 東京 82187

「浄土」購読規定

一部 定価 金六十円

会費一カ年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 四月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十四年三月二十五日 印刷
昭和四十四年四月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式
会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六
発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和四十四年三月二十五日印刷 昭和四十四年四月一日発行

浄土

第三十五卷

第四号

定価金六拾円 (送料六円)